

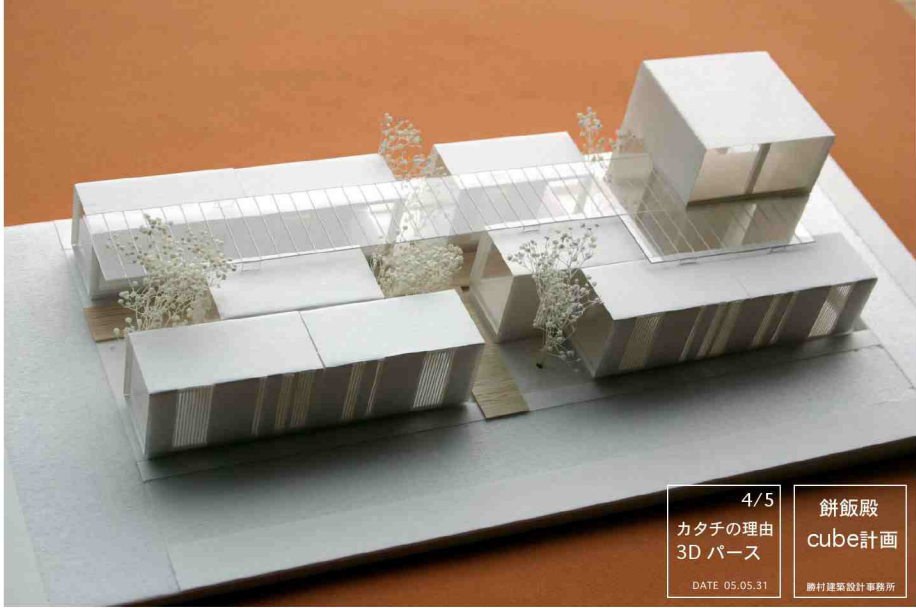
地域と個性、低成長の安定、スローフード、環境の世紀といわれる「サステナブル社会」が確実におとずれ始めている。大きさ・成長・右肩上がりに対する信仰が崩壊した現在、物事をより柔軟に多義的に考える必要性が高くなっている。価値観の移り変わりは早く、ブームやヒットのサイクルは増々短くなり、確実な未来が見えにくくなっている。サステナブル社会、つまり持続可能な社会とは、価値観や社会の変化に対し、柔軟に対応できるシステムのことである。クラッシュ・アンド・ビルドを繰り返さず、ハードをフレキシブルに、テンポラリーに可変機能をそなえておくことである。町も商店街も建築も、新陳代謝している。

町家のカタチは奈良らしく魅力的だ。しかしこの場所に一軒の町家を作ることに、意味がないだろう。内容と不一致の「老舗」をきどるのは、「ほんものの老舗」に失礼だ。ここに外から持ち込む「老舗」など、もともと無い。仮に吉野の「老舗」が出店しても「老舗店舗」は吉野であり、【餅飯殿】は広告塔でしかない。

この場所に大きなビルつくることには、賛成出来ない。かつて大型スーパーの進出に反対した各地の商店街が、今度はその撤退に困惑している。大資本は意外なまでに脆弱で、簡単に人と街を切捨てるのを知った今、ひとつの企業と運命共同体になることの危険に向うのは大ききリスクでしか無い。個人の集まりである商店街は独自の手法・切り口・個性で特色を創り出す必要がある。大資本の門前町になってはならない。頼れるのは人という個人の意欲と能力と個性である。

奈良一番の奈良町にする、という選択肢はある。高山、倉敷、津和野、伊勢おかげ横町のように中世の町並みを再現する。飛騨高山や伊勢おかげ横町はまるで映画のセットと言ってもよいくらいに見事に町家を再生し観光客を呼び込んでいる。奈良町はようやく保存・再生がスタートしたが、住宅地と混在している為に点在しており町家が建並ぶことはない。餅飯殿は線として集約されており、規模も他の名所と比較しても可能性は高い。もし実現すれば【餅飯殿】は全国有数の観光名所になるのは間違いない。奈良市の人口37万人、奈良市の観光客は1300万人/年。これを呼び込むことになる。問題点は、通りすべてを町家に改造する必要があること、アーケードを撤去する必要があること、である。

最も現実的で有効な手法は現代と中世を合わせ持つ空間を創ること。駅前商業ゾーンと奈良町の中央に位置する地の利を生かし、観光客はもとより、市の西部、南部の地域の人々をもターゲットに据える。郊外や駅前に無いモノ、個人や商品そのものの魅力に基づく小規模店舗の集合体に特化する。奈良の老舗は元々、特殊工芸・手作りに始まる。奈良晒・蚊帳・一刀彫り・焼物・和菓子・漆器・葛・工芸の世界で日本各地と繋がっていた。魚万は食の工芸品を開拓している。商店街が価値観の多様化・情報革命・流通革命・車社会の発達・都市のスプロール化に苦しんだのは全国共通であり、低成長または安定期にはいつつある今こそ、地域と人の個性に回帰しなければならない。奈良で最も長い歴史を持つ【餅飯殿】のポテンシャルはもっと高くてもいいはずである。



4/5  
カタチの理由  
3D パース  
DATE 05.05.31  
餅飯殿  
cube計画  
藤村建築設計事務所

© 2013 CUBE  
1-1-1 奈良市 奈良県 540-0201  
074-744-1111